

# 自 我 と 役 割

—— 「役割距離」からの自我論構成 ——

坂本 佳鶴恵

従来の役割距離およびドラマトゥルギーの解釈は、それらが含んでいる真の意味を十分に汲み取っていない。それは、従来の自我論や役割理論における社会的規定性と動機（個人的創発性）の関係の把握が、正しくなかったり、明確に把握されていないという事態を反映している。本稿では、役割距離やドラマトゥルギーの解釈をてがかりに、従来の自我論や役割理論における社会的規定性と個人的創発性による社会と動機の把握が看過してきた、両者の入れ子的な構造を明らかにする。

## 0. 問題提起

Parsonsの描く人間像は、個人の自発性や創発性に欠けるホモ・ソシオロジクスとして批判されているが、社会的規定性と個人の自発性や創発性の関係は、自我論と役割理論で長く論議されている課題である。自我論では、他者による自分の認識を「社会的客我」として取り上げたJames以来、自我の社会性が問題とされるようになった。〔船津：1983〕Cooleyは、自我が一個人の内部の問題として完結しているわけではなく、その形成には、他者の観点が不可欠な要素であることを指摘した。その後、Meadによって、自我の社会性は、有意味シンボルが喚起する、他者と共有された反応を基盤とした、役割取得という概念によって表現されている。このような自我の社会的性格への理解が進むと同時に、その社会性に対する自発性や創発性の存在をめぐる論争がなされるようになった<sup>(1)</sup>。シンボリック・インタラクショニズムは、社会性をこの役割取得で踏まえつつ、相互作用における社会的な意味を解釈し変形する主体をおく。自我は、自身に対する意味の呈示とその意味を解釈し評価する自己の内的な相互作用として捉えられる。〔Blumer 1969〕

社会的規制と自我の関係を、行為規範と動機志

向（構造—機能主義）と捉えるにせよ、意味とその解釈作用およびそれに基づく行為（シンボリック・インタラクショニズム）と捉えるにせよ、そこには、社会と自己の内的な過程を節分し、前者に社会的規定性を、後者に創発性の源泉を置こうとする傾向がみられる。しかし、自己の創発性をもたらすとされる内的な過程が、価値の内面化や、内的過程が解釈結果となることによって生ずる社会的規制としてではなく、内的過程自体が社会的類型として予め規定され、共有されていることがあるということは、あまり論じられていない。

本稿では、このような自我と社会に関する問題構成、すなわち、自我論および役割理論で看過されている内的過程の制度的な規定性について論ずる。社会的規定と創発性が対立した領域を形成するのではなく制度や相互作用の種類に依存した問題であることをみる。このような問題点を明らかにするものとして、役割距離を中心としたドラマトゥルギーの解釈の問題を取り上げる。これらの問題は、ある相互作用の状況においては、社会規範が行為のパターンの統制のみに限らないこと、また、自我の選択の問題が行為の選択に限らないことを示し、役割の持つ自己規定性を明らかにする。

## I. 役割距離の解釈をめぐる問題

### (i) 役割葛藤説

役割距離とは、役割と役割を遂行する行為者との間に示されるある距離のことである。それは、たとえば、メリーゴーランドの馬に跨がった少年がある程度年齢が上であると、落馬しないための皮紐を無視したり横着な態度で馬を扱ったりするなどして、メリーゴーランドの騎手であることに熱中していないことを示そうとすることや、医者が真剣な手術の現場で、冗談を言って、手術をする医者という役割から距離をとることを指す。

役割距離の主要な解釈には、役割葛藤の問題としてみる見方と、アイデンティティの問題としてみる見方がある。役割理論においては、役割距離の事例のいくつかが、異なる役割間の問題として考えることができるために、役割葛藤の解決として把握されている<sup>(2)</sup>。たとえば、メリーゴーランドの例は、メリーゴーランドの馬の「騎手」の役割と「ある程度の年齢の少年」としての役割が矛盾しているための葛藤の解決手段と考えられる。役割距離は、行為パターンとして共有されていることが多いので、役割距離の形式自体が、役割葛藤の規範的な解決手段とみなされる。

しかし、役割距離は、必ずしも異なる役割規範の矛盾を想定できるわけではなく、また、役割距離を採ることによって生ずる効果も、全く別のものとして把握できる。たとえば、医者が手術で冗談を言う例は、役割葛藤としての解釈では、「まじめな医者」という役割と「ユーモアのセンスのある市民」という役割間の葛藤の解消とされる。しかし、これが、緊張した状況を緩める配慮であったり、心の余裕を示すことで有能さをみせるという効果を持つことを念頭に置けば、医者と他の相反する役割規範との葛藤の結果とみる必要はない。冗談を言うことによる効果は、市民役割との葛藤を解消するところにあるというより、たんにある種

の医者役割から距離を採ただけで、それがむしろ医者役割の遂行に対してある種の効果を持っているとみる方が妥当であろう。同様のことが、たとえば、乗馬をしていて、余所見や冗談をいながら、その乗馬中の腕前で自身の乗馬の能力を判断しないように予防線を張っている少女の例などにもあてはまる。

役割距離が、役割葛藤の問題としてとらえることができないのは、それが行為規範の問題ではなく、自己規定の問題だからである<sup>(3)</sup>。役割距離を採ることで達成されるのは、矛盾する役割としての行為規範の処理ではなく、役割が提供する自己規定と自己の持つ自己イメージの間の処理の問題である。Goffman は次のように語っている。「・・・個人とその個人が担っていると想定される役割との間のこの「効果的に」表現されている鋭い乖離・・・を役割距離と呼ぶことにする。・・・個人は、実際に、その役割を拒否しているのではなく、すべてをうけいれるパフォーマーにとって、その役割のなかに当然含まれているとみなされる事実上の自己を拒否しているのである。」(Goffman 1961 = 1985 : 115) 役割距離は、役割が統制する行為類型の問題、すなわち行為規範間の葛藤の問題ではなく、役割が含意するある心的態度への遡及の問題なのである<sup>(4)</sup>。

### (ii) アイデンティティ説

では、役割距離が問題とする自己規定とは何なのか。従来、役割の自己規定的な側面は、アイデンティティの問題として考えられてきた。アイデンティティは、内的な一貫性、統合感、存在感に関わる。役割が提供する自己は、個人の自己イメージを承認することで、アイデンティティの形成や拡散に影響する。役割距離のもう一つの解釈は、役割距離がこのようなアイデンティティの維持の手段とみる見方である。たとえば、Dritzel は、

役割距離を役割アイデンティティからの自己アイデンティティの疎外として考える。役割を、個人の社会経済的な決定性と存在の集合的様態・その解釈を媒介するものとして、社会経済状態への適応や抵抗という観点からみる彼は、役割距離を自己疎外として、規範の変更につながる契機と期待する。〔Dritzal：1975〕Berger にも役割距離をアイデンティティの問題として考える。彼等は一次的社会化と二次的社会化にわけ、役割距離を後者とおく。全体社会に共有された知識における社会的自己規定のずれは統合感において問題を引き起こすが、部分集団内の位置づけとしての自己規定は、二次的社会化のためずれてもアイデンティティにおける問題を生じることなく、他の役割を含む自己全体から切り離すことができるとしている。〔Berger & Luchmann 1966=1977〕<sup>(5)</sup>

Bergerらのいうように、役割距離は、存在感や統合感としてのアイデンティティ問題を引き起こすわけではない。むしろ逆に、個人は積極的に自己規定の不一致を選択する。役割距離における自己規定は、このような存在感や統合感と本質的に関係しているものではない。ある種の役割における自己規定は、アイデンティティ形成と関係するかもしれないが、それが役割の持つ社会的な自己規定の本質とすることはできない。役割が規定する自己とは、どのような意味や機能を持つのだろうか。「乗馬している人」という規定は、行為者の自我アイデンティティとは関係してなくても、何らかの自己規定に働きかけ、行為者はそれに対処するのである。役割は、どのような点で自己規定を規制することになるのだろうか。また、そのような役割が規定する自己から離れることによって、個人は何を達成したことになるのだろうか。

## II. 行為 = 動機連関としての役割

Goffman は、従来の役割概念の責務・期待・

義務といった規範性を示す言葉のあいまいさと狭さを排して、「役割は特定の位置における諸個人の典型的な反応である」と規定する。〔Goffman 1961=1985：95〕Goffman のこのような定義は、シンボリック・インタラクショニズムのそれとほぼ同様のものであるが<sup>(6)</sup>、Goffman の場合には、理論的な差異を示すためにこの定義を採用したというより、Goffman が取り上げようとした、自己呈示の問題を、役割理論の範疇で描くために設定しているのである。〔Goffman 同：104〕

Goffman は、役割の規範性を広義にとり、役割規範が規制する対象を拡げることによって、役割が自己として機能するという事態を詳細に描いた。Goffman の役割は、歩き方や話し方、髪の毛の掻き揚げ方、その他のちょっとした仕種や外見などによって構成されている、日常我々が判断する「らしさ」に照準している。たとえば、医者が落ち着いた声で話すのは、医者らしい。個人は、白衣を着て落ち着いた声で話すなど、医者らしくあることによって、自身に関する一定の情報を伝達する。そのような投企を、Goffman は「自己呈示」と呼ぶ。個人は、ある役割典型を実現したり、役割典型に反したりすることによって、自己呈示を行う。つまり、役割典型に対する関わり方によって、自身をどのように同定しているのかを示し、また、他者が自身を同定する際の情報を提供する。他者は、その情報をもとに、彼／彼女がどのような人間であるのか、すなわち、過去・現在・未来にわたる存在様態の推量をおこない、それに対して適切と思われる対処を用意する。たとえば、医者らしい人には、その社会的な地位を推量して丁寧な言葉使いになったり、その職業的な知識の保有を推量して、最近頭痛がすることを話題にしたりする。

Goffman の役割が「自己」であるのは、役割

が、このような個人の過去・現在・未来にわたる行為や態度を推量し、ある種の存在様態を同定するというだけにとどまらない。役割に対してそうした振舞いをなす当該個人は、役割との自己同一視によって、非常に特殊な感情移入をおこなっているのである。たとえば、スティグマは、私の自己規定と他者から規定された自己（つまり役割）のずれをもたらす。個人は、このために苦しみ、両者を一致させるためにさまざまな方策を講じ、自己規定に合致する役割を得ようと様々な工夫をこらす。役割は自己規定と一致しなければならないのである。逆に、役割距離は、役割と自己規定のずれを目立たせることによって、役割へのコミットを拒絶する自己表示である。この場合には、実際には役割と自己規定は一致していないが、役割の遂行による自己規定との一致が社会的に（当該個人および他者によって）想定されていることが前提となっている。もし、役割距離をとらないでそのまま役割を遂行すると、そういう人間として同定される。また、当人もその同定がなされることを心得て遂行しているのだから、当人も自身をそのように同定していることになる。役割は、役割距離その他の操作によって、個人に自己として「受け入れ」られたり、受け入れられなかったりする。

このようなGoffmanの戦略記述では、自身と役割による自己規定の一致が自己にとっても他者にとっても前提となっていることがわかる。この個人の側の自己規定と役割の間の一一致の想定は、自己に対しては勿論、他者に対してであること、つまり、他者が、当該個人が持つ自己規定と役割が一致するとみなすことが重要である。つまり、役割どおり行為すれば、個人は、そのような自己規定を持っていると考えられるのであり、また、そのような自己規定を持つことを要請される。たとえば、教師をそのまま演じていれば、当該個人

は、教師という自己規定を保有していると考えられてしまう。

役割の規定する自己と個人の持つ自己の一致・不一致が、自己にとってばかりでなく、他者にとっての問題でもあるということは、役割が規定する自己が、自分がどう思っているかという自己把握と密接に関連していることを意味している。もし、この役割が指示する自己が、単なる位置づけや価値付与ならば、自己規定との不一致は、当該の自己にとっては問題になっても他者にとっての規定に意味を持つことはない。当該個人が不満であるとしても、それによって、規定された位置や価値が変わるわけではないからである。しかし、役割距離が認められるということは、当該行為者の社会的規定に、個人の自己把握が何らかの影響を持ち、その意味を変容させてしまうということである。

Goffmanの役割は、規範的な行為期待ばかりではなく、サンクションの程度が弱い（異質でもある）さまざまな予期を含んでいる。自己と連結しているのは、このような予期の部分であり、これが役割の自己を形づくって自己規定に直結する。個人は、多くの場合、その状況においては、役割をそのまま自己規定としている。正確に言えば、役割が個人がその場で持っている自己規定だとみなされている。たとえば、白衣を着て医者らしく振る舞っている人は、自分が医者でないと主張しないのは勿論、その場では、「父親」であったり「家のローンおわれる人」であることを主張しはしないであろうし、そのような行為は行わないであろう。つまり、個人は「医者」として自己を把握し、「医者」という役割が持つ動機や価値に従って行為しているとみなしうるのである。もちろん、仕事前に前日の家庭でのめごとを思いだして考えこんだりするかもしれないが、そうした態度は、役割に没入しておらず、役割に対して距離をとっているとみなされる。これは、役割に完全

には合致しない。このような状態にある人は、部分的には医者らしくない投企を行うと考えられているし、また逆に完全に医者らしく振る舞っている人は、医者としての動機以外のものによって行動しているとは、通常みなされない。このことが意味することは、役割による自己規定は単なる自己把握のみならず、個人の動機や志向・判断までを拘束するということである。我々が役割によって個人の行為や態度を予測できるのは、単に外的な行為の予測にとどまらず、このような行為を導く内的な過程そのものをも推量することが可能となっているからである。このような意味では、役割は、完全に遂行されているときには、その瞬間において「自己」そのものでもあるのである<sup>(7)</sup>。

### Ⅲ. 行為=動機連関としての自己規定の選択

従来、個人と社会規範の関係は、ある価値志向を持つ個人の行為が、社会的に統制されるという点にあった。社会規範は、行為の規制を対象とし、役割は、行為類型とみなされている。役割理論は、行為がいかに秩序だてられているかを対象とし、行為選択に対するサンクションづけによって、個人の行為を選択する動機に制約を加える。ここでは、自我と社会の関係を、このような、行為の選択をめぐる問題をたて、その選択過程あるいはその源泉を問うことによって考察することから、もう一つの選択の問題へと焦点をずらすことになる。ある行為がなされたとき、理論モデルは、その行為の選択を動機や解釈といった個人の内的な過程の結果として説明する。しかし、考えてみると、当事者において、ある行為が選択されたときに、それがどのような動機の結果とみなされるのかということは、実は知られていることが多い。医者が手術をするとき、それは、医者の職業的な動機づけによるものであり、職業人としての行為である。ある行為が選択される時、それが、ど

ういう人間としておこなわれるのかということは、すでに決定されている。ただ行為のみが行われるということとはありえない。電車のなかで子供を叩いている人がいると、その性別や年齢、格好、子供への叱り方、周囲への気の配り方などで、母親としてなのか、先生としてなのか、ベビーシッターとしてなのか、兄弟としてなのか、あるいは他人としてなのか、などを推量することができ、そこからそれが子供への愛着によるか、社会成員としての教育なのか、自分の仕事が面倒になるからなのか、など動機を推量することができる。そして、このような動機の推量がなされるということも、人は予め知っている。ここに行為の選択ではなく、ある人間の選択、すなわち、ある動機連関の選択がなされる余地がある。父親的な行為や態度の遂行は、ある人が父親的な行為を行うかどうかということだけの問題ではない。その行為がたまたまの動機で採られたのではなく、父親としての価値および動機のもとで行為しているという、ある行為=動機連関の選択でもあるのである。役割の持つ自己規定性は、とられるべき動機を明示する。

自己規定をめぐる操作は、通常価値の問題だと思われている。すなわち、より高い価値を持つイメージを得るための操作である。しかし、役割距離が示すのは、このようなイメージの価値ではない。役割距離の効果として、より価値のある自己イメージを得られることがあるが、それは、役割距離がある条件のもとでとられた結果である。ある自己規定、すなわち或る動機連関に関与しないことを示すが、ある役割行為の完全な遂行とあいまって、その動機連関にもっと関与していたならば、より完全な行為遂行をもたらしたかもしれない、という予期を獲得することになる。それは、役割距離をある条件下で利用した場合に出る効果なのであり、優秀な営業マンであることを認められるために、売上げを伸ばす努力をしたり、

好印象を与えるために服装に気を使うこととは異なる。つまり、役割距離は、ある役割が想定する動機連関に対して作用するのであり、ある動機を自己の現在の動機とするかという問題なのである。

#### IV. ドラマトゥルギーの意義

以上のことから、ドラマトゥルギーの従来の理解は、その真の意義を十分に捉えていないということを示すことができる。ドラマトゥルギーは、演劇の概念を用い、「演出」として行為をみる。ドラマトゥルギーには、演劇を単なる類比として考え発見的道具として使用する手法と、社会生活を演劇と全く同様の劇性を持つものとして考える手法の2つがある。〔Lyman & Scott 1975 = 1981〕前者の場合には、社会事象が一回起的であることや、独立した観客がおらず全員が観客であると同時に演技者であることが、演劇との相違として挙げられている。〔Goffman 1959 = 1974〕いずれの手法にせよ、演出という発想の中心概念は、本来の自分とは、異なる或る役柄を演ずることにある。従来ドラマトゥルギーは、演じられる自己とは何なのかという十分な検討をなさずに、「本来の自分」に演技者の意図や動機を、「演じられる役柄」に実際の行為や価値的なイメージを付与して解釈する。つまり、演技者は、観衆のまなざしを意識しながら、観衆にある印象を与えるために、本来の自分の動機とは別に、そのようなイメージを達成する行為をおこなう。

しかし、このような解釈は、ドラマトゥルギーが行為ではなく自己規定の選択を対象とするという独自の理論的含意を見落としている。役柄を演ずるということは、ある自己を演ずることなのだが、それは単なる印象の問題ではない。既に述べたように、良いイメージや悪いイメージという価値の取得に問題の本質があるわけではないのである。問題の焦点はまた、演技者が本当にしたいわけで

はない行為をするという点にあるのではない。そうした行為選択の問題ではなく、自己規定全体の選択の問題である。ドラマトゥルギーを行為の選択と捉える観点からは、演出された行為に対してあるべき行為が対立し、演技者の動機は、本当は、演出された行為ではなく、他のあるべき行為をもたらすはずであったことが問題とされる。ここでは、演技者の本当の自己、つまりその動機がもたらすはずであった行為が偽られ、演出された行為が選択されることが問題となる。しかし、ドラマトゥルギー現象において社会成員が感じとっている意図や動機は、自分の本当の意図を隠して意図とは異なる行為を行うということではなく、ある行為がある意図や動機を持った人間を示すということに自覚して、その人間類型の認知を選択し操作しているということにあるのである。問題は、ある意図や動機を持った人間がその動機に基づく行為ではない偽りの行為の選択を行うということではない。ある意図や動機を示す行為連関を、他の意図や動機と区別して選択したということにあるのである。役割演技は、行為選択が意図や動機の選択となっている点に意味がある。

このような行為=動機連関の選択は、関与・コミットメントの有無の形をとる。ある行為=動機連関が自己のものとして採用されるということは、たとえば、しつけの悪い子供に対して、教師である人が、周囲の目を気にして仕方なく叱るのではなく、人間教育を心から信じて叱っているように見せるということである。そこでは、教師という役割が内包する動機に対してのコミットメントが選択されている。コミットメントは、通常心理的な没入状態を指すが、ある行為=動機連関を選択するということは、このような情緒的な意味をもなっている。役割から距離をとるという表現も役割が持つ情緒的な誘因を示唆している。<sup>(8) (9)</sup>

## V. 自我と役割

Parsons は、パーソナリティを「一人の個人としての行為者の行為の志向と動機の組織化された体系」と定義し、社会体系を、ある共通の状況における複数の行為者の行為が相互作用の過程をなし、その相互作用の分化と統合によってかたちづくられるものとして、規定する。(Parsons 1951 = 1975 : 9) 役割は、パーソナリティと社会体系の接点であり、また社会体系の基本的な単位である。役割は、パーソナリティ間の相互作用が安定化し、一般化することによって形成されたものと考えられている。(Parsons 1951 = 1975 : 31) Berger らは、これを対象化、客体化という言葉で説明している。(Berger & Luckmann 1966 = 1977) このような相互作用の安定した型は、行為者間の相互行為を統制することとなる。「役割とは、行為者の志向のなかで、相互作用の過程への彼の参加を構成し、また規定するような、組織化された部分である。それは行為者自身の行為と、彼が相互作用する他の人々の行為に関する一組の相補的期待を含んでいる。」(Parsons & Shils 1951 = 1960 : 37) このように、役割には、行為選択の統制という含意が強く、行為を導くあらゆる動機はパーソナリティ体系に帰属され、役割自体がある状況では動機を内包し規定することが明確に把握されてこなかった。そのために、役割距離やドラマトゥルギーも、行為選択の問題か、アイデンティティや価値の問題としてしか考えられてこなかったのである。

他方で、自我論においては、個人がとる行為をめぐって、社会的な規定性と個人の自発性、創発性、独創性との関係が中心的な課題であった。そのため、自我は、個人がとる複数の役割の統合体プラス $\alpha$ （役割に一貫性を与えるもの）とされたり、社会的な規定性を me、自発性を I と呼んで、両者の相互作用が仮定されたりしている。こうし

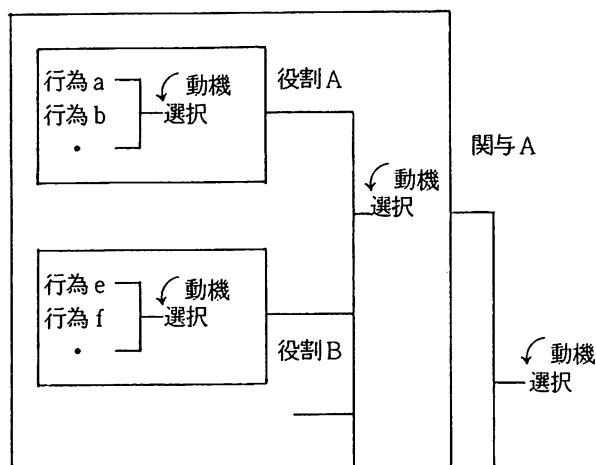
た図式における、個人の動機や意図の位置づけは、もっとも単純には、社会的な行為規制、すなわち役割に対する個人の自発性を対置するものである。役割として決定されている行為を遵守したり逸脱したり、その人らしさを示すような独特の方法による行為遂行をおこなう主体に、動機や意図が還元され、役割が主体を規制し、主体が役割行為を変更するという相互作用が行われるとされる。I と me の相互作用に関しても、このような解釈が一般的である<sup>10</sup>。しかし、このモデルでは、役割が、行為類型であるばかりではなく、動機も規範の規定として含みうることを説明できない。

Mead の I と me は、より広く解釈することが可能である。Mead は、有意味シンボルが他者と同一反応を、シンボルを発する自己の内部に引き起こすことを前提として、自己による他者の反応の採用という概念を提出する。この他者が社会あるいは集団全体と仮定される一般的他者であるとき、採用された反応は、me として役割をなす。me は、自我と社会の間に共有された、自我によって取得された社会的期待なのである。この取得された社会的期待は、行動にあらわされる過程で或る変形を受ける。その際に働くのが I である。I は me に作用するが、I の反応は決してあらかじめ予測することはできない。そして I はその作用が現れると me になり、また新たに I の作用を受ける対象となるのである。

ここでは、me を行為にかぎらず、動機を含む一切の社会的期待と考えることができ、I はそれに対する抽象的なレベルでの選択の自由とおくこともできる。このようにすると、行為=動機連関の類型を選択することも可能となる。

社会的期待に対する選択およびその動機の形で自我を把握すると、社会的期待にも動機や選択が含まれており、実は、自我における社会性と自発性は、二つの相互に対立する独立した要素間の相

相互作用などではなく、無限の入れ子状をなしていることがわかる。



我々は、行為の選択に対して、行為者の内的過程に第一次的な要因を求める説明モデルを採用している。自我は、多くの場合この選択の説明図式として存在する。ある行為を選択したのは、ある動機があったからである。しかし、ドラマトゥルギーが明示するのは、さらに当事者自身がこの説明図式の連関をある程度把握し、このような行為＝動機連関としての自我自体を選択することがあるということである。子供を叱る教師は、子供を叱るという行為のみならず、空腹であるための怒りではなく、生徒に対する信頼を裏切られて腹を立てた。という教師としての動機をも選択し、「教師らしく」叱るのである。行為の選択においては、行為の規制を社会的制約、行為選択の説明である動機が個人の内的過程となるが、行為＝動機連関の選択では、行為＝動機の規制が社会的制約に、その選択が個人の側に、帰属される。この選択に対しても、我々は、ある内的な過程を想定して説明することが可能である。たとえば、父親らしく振る舞わず父親としての動機を採用しない（コミットしない）のは、照れているからであるなど。我々は、さらにこの選択を説明する動機連関との対、すなわち〔行為＝選択（動機）〕＝選

択（動機）に対しても選択を行うことができ、それもまた、内的な連関で説明することができる。たとえば、父親らしく振る舞わず照れているように見えるが、本当は父親になりたがっているなど。この選択の連鎖は、理論的には、無限に遡ることが可能である。実例が可能なのは、せいぜい3段階ぐらいまでであろう。このようにして、我々は、近代人間学の理論モデルとして動機連関の説明図式を用いているばかりではなく、日常生活においてその動機連関の説明図式を図式として利用し、選択し、さらにそれをまた動機連関の図式によって説明するという入れ子的な「自我」の構造を持っている。

従来、様々なものが自己あるいは自我と呼ばれてきた。たとえば、行為を選択する動機であったり、行為を選択する動機群の共通性であったり、行為と動機の総体が自己であったり、動機を反省するものであったりする。Goffman は、自己を、行為＝動機連関とその選択の、2重の意味で使っている<sup>10)</sup>。これらの自己や自我は、上記の図の一部分を名指したものである。自我は、それぞれの選択と選択を説明する内的な過程によって成立させられる。図の左から順に、行為の選択を第一段階、行為＝動機連関の選択を第二段階、その選択を第三段階、その後の、選択や動機を選択の連鎖をN段階とおく。自我を社会に対する未規定な創発性とする、それぞれの段階での選択と選択の説明形式である動機を自我と呼ぶことができる。第一段階では、行為の選択とその内的な説明である動機が、第二段階では、第一段階での自我が選択の対象となり、その選択と内的な説明である動機が自我となり、第三段階では、第二段階での自我がまた選択の対象となり、より高次の自我が出現する。自我は、選択のどの段階を選ぶかで異なり、その段階に応じた社会性が選択対象として出現する。



行為の意図や動機は、社会的な説明図式であり、しばしば社会によって異なる。行為に意図や動機があるということさえ、社会的な説明図式である<sup>12</sup>。特定の行為の選択は特定の動機によって説明され、それは人間類型として共有されている。そして、同様に、特定の行為を選択する動機を選択する動機もまた、人間類型をなす。こうした選択をどの段階まで遡っているのか、すなわち、どこまで社会によって決定されているのか、の決定も社会や制度によってなされている。たとえば、精神分析は、人が通常自らの選択とみなしている行為の動機が、当事者には気がつかれない環境要因によって決定されていることを仮定している。また、日常の決まりきった行為においては、その行為の動機さえ問題にされない。

このような入れ子状の自我を、meに変化したIとIとの相互作用の連鎖に還元することはできない。Iがmeに変化するのには、時間的な問題なのである。現在のIは、次の瞬間それが行為に表現されれば、meとなり、またIの反応を引き起こす。このようなIのme化の現象は、予期されない選択可能性が、選択された瞬間に事実として意味を持ってくるといふ事態である。ここで問題なのはむしろ、行為＝動機連鎖のどの段階で選択するかという、選択の段階による行為の質および相互作用のあり方であり、そうした段階設定自体が、役割距離や役割演技という相互作用の型によって、或いは精神分析などの社会制度によって、社会的に決定されているということである。

自我がなんらかのまとまりある実体として考えることができるのは、こうした自我の無限後退現象を想定せずに、予め一定の段階までとどめていることによっている。つまり、第一段階でとどめる場合には、行為に対する動機が自我と呼ばれ、第二段階までの場合には、行為主体に対する反省主体として現れる。そして、第二段階以降、選択

は内的な反省過程の循環と考えられ、それが常に行為を通じて社会規範に結びつけられているということが省みられない。その結果、自我は、いかなる無限後退も第二段階と同様の行為主体に対する反省主体として片付いてしまうのである。つまり、動機に対する動機に限定されてしまう（たとえば、子供に愛情を持つのは子孫保存の本能からであるなど）Iのme化も、通常、反省主体が反省客体におきかわる内的な反省過程として解釈されている。動機の反省図式は、規範的説明図式の選択・採用ではなく、内的な論理の無限の後退としてのみ把握する。それは、いわば子供がよくする何故という問いを重ねていくような方式である。しかし、このような過程においても、動機の動機を問うときには、やはり、ある規範的類型が採用されているのである。子供を叱るのは、愛情からというのも社会的に共有された親の役割類型なら、それが子孫保存の本能によるというさらなる動機にもやはりある科学的な人間類型が採用されている。我々がここで扱ったのは、相互作用の現場において当事者が予期として用いる類型と選択の階梯であるが、同様のことは、反省の連鎖をみるときにも当てはまるのである。

ここで述べていることは、自我がすべて社会決定的な存在であるということではない。我々が動機や意図や内面と呼んでいるものが、社会に対する自発性や自由なのではないということである。社会に対する自発性は、動機や意図によって説明されない、遡りうる最終段階の選択にある。社会的な決定性やそれに対する自発性は、その社会や制度が想定しうる段階に応じて存在する。どのような社会的決定性や自発性があるかということ自体が社会的現象なのである。そしてまた、それは社会全体に共有されているともいえず、さまざまな部分制度によって異なっている。

## VI. 結

従来、自我と役割、あるいは自我の社会性と自発性の関係は、暗黙のうちに、行為類型=社会=客我と動機づけ=主我の2項図式によってなされてきた。役割距離やドラマトゥルギーの解釈の不正確さも、こうした、行為類型Vs意図による演出という図式にこだわるところに起因している。相互作用における社会規範は、さまざまなレベルを含んでおり、ドラマトゥルギーは、ある特定の段階まで選択を遡る相互作用なのである。従来の自我論は、自発性や創発性の源泉を探ることに力点をおくあまり、社会性、meが複数の層をなしうること、そうした社会性自体が社会性（相互作用のあり方）によって異なりうる事が注目されていない。このようにmeをおくと、従来、あいまいに主我に属するとされてきた個人の選択やその動機も、社会や制度によっては、予め社会的に共有されている知識なのである。我々は、社会生活を営むうえで、ある社会的規定の共有を常に前提としているが、ここで問題としているのは、研究者が、我々の行為や動機を全て社会規範によって説明することができるということではない。相互作用を営む当事者が、社会や制度に規定された相互作用に応じて、様々なレベルにおいて社会類型を用いながら、相互作用をおこなっているということなのである。動機は自由な選択の源泉であるが、それ自体、社会的な知識として共有されている場合がある。この動機の社会的決定性を念頭におくと、そのまた動機も社会的に決定されえ、どこまでが社会的に決定されており、何が選択なのかは、当事者にとって無限の連鎖をなしうる。しかし、この連鎖は、制度的に一定程度の段階まで遡ることが共有されており、我々は、制度や相互作用の種類によって、異なるレベルの自発性や社会的決定性を手にいれているのである。

## 注釈

1. たとえばMeadのIの解釈をめぐる論争
2. この解釈の典型としては、〔Coser 1966〕をみよ。
3. この意味では、役割距離を行為規範の問題ではなく、それに対する心的態度の問題とするStebbinsの批判は正しい。
4. Goffmanの初期の著作の主題は、スティグマや役割距離、アサイラムの二次的調整など、自己の持つ自己イメージと社会が付与する自己イメージとの乖離をめぐる様々な戦略だといえる。
5. しかし、Bergerにおいては同一化（自己規定の一致）と内在化（役割知識の自明性の共有）の関係が明らかではない。一次的社会化においては、内在化には同一化が必要だが、二次的社会化においては、同一化がなくとも内在化することができるのであるが、自己規定と規範の遂行や知識の共有との関係は不明である。
6. たとえば、McCa11らのそれと比較してみよ。〔McCa11 & Simmons 1966: 67〕
7. このようなゴッフマンが示唆する役割と自己との関係は、役割と自己を全く独立の形象としてたて、自己は役割を演じながら役割を操作していくという近代の人間観とは別のものである。むしろGoffmanのある種の自己は、役割と同一のものであり、自己も役割も一種の行為=動機連関であって、予め公的に決定され、社会的に共有されている行為=動機連関を役割とし、個別的で変更可能性が高く、共有範囲が狭い行為=動機連関を自己と呼んでいるといってもよい。
8. コミットメントの従来の用法については〔Becker 1960〕など。
9. こうしてみると、Goffmanは、近代の分業における疎外、自己の断片化という観点からの役割の感情中立性や葛藤に対して、強力な自己包絡の力を記

- 述したともいえる。
10. たとえば, [Blumer 1969]
11. [Goffman 1967] および注7を参照せよ。
12. 意図や動機が存在の社会的規定性については,  
[Anscomb 1957], [立岩 1986] [佐藤 1987]

が, 近代西欧社会の特異性を中心に言及している。  
こうした社会的存在としての動機や意図は, 近代西  
欧社会内部でも, 社会的装置によって剥脱されてい  
ることもある。[坂本 1986]

## 文献

- Becker, Howard 1960 "Notes on the Concept of Commitment" A. J. S. (66) : 32-40
- Berger, Peter & Thomas Luckmann 1966 *The Social Construction of Reality* = 1977 山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社
- Blumer, Herbert 1969 "*Symbolic Interactionism : Perspective and Method*"  
Prentice-Hall Inc.
- Coser, Rose 1966 "Role Distance, Sociological Ambivalence, and Transitional Status Systems" A. J. S. (72) : 173-87
- Dritzal, Hans 1975 *Social Roles and Political Emancipation International Journal of Sociology* vol. 5-5.
- Erikson, Erik 1968 *Identity : Youth and Crisis* = 1969 岩瀬庸理訳『主体性 — 青年と危機』北望社
- 船津衛 1983 『自我の社会理論』恒星社厚生閣
- Goffman, Erving 1959 *The Presentation of Self in Everyday Life*, Penguin  
= 1974 石黒毅訳『行為と演技』誠信書房
- 1961 a *Encounters : Two Studies in the Sociology of Interaction*,  
The Bobbs-Merrill = 1985 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い — 相互行為の社会学』誠信書房
- 1961 b *Asylums : Essays on the Social Situation of Mental Hospitals and other Inmates*, Doubleday Anchor = 1983 石黒毅訳『アサイラム』誠信書房
- 1963 *Stigma*, Prince-Hall = 1970 石黒毅訳『スティグマの社会学』せりか書房
- 1967 *Interaction Ritual : Essays on Face-to-Face Behavior*, Doubleday Anchor
- Anscombe, G. E. M. 1957 *Intention*, Basil Blackwell = 1984 菅豊彦訳『インテンション — 実践知の考察』産業図書
- 石川洋明 1985 「自我論は何を課題とすべきか」ソシオロギス9
- 正村俊之 1986 「パーソナリティ・システムの生成としての自我形成」思想(747)
- Mc Ca11, G. & Simmons, J. 1966 *Identities and Interactions* Collier-Macmillan, Canada

- Mead, G. H. 1934 Mind, Self and Society ( Morris C. W. ed. ) The University of Chicago Press =1973 稲葉三千男他訳『精神・自我・社会』青木書店
- 宮台真司 1986 「規範の三層構造論」ソシオロギス10
- Parsons, Talcott et. al. 1951 a Toward a General Theory of Action, Harvard Univ. Press =1960 永井道雄他訳『行為の総合理論をめざして』日本評論新社
- Parsons, Talcott 1951 b The Social Systems, Free Press =1974 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店
- 坂本佳鶴恵 1986 「スティグマ分析の一視角 — 「人間」であるための諸形式に関する考察」現代社会学22
- 佐藤俊樹 1987 『規範と『人間類型』 — Weber 社会学の批判的展開を目指して』東京大学修士論文
- 佐藤勉 1980 「役割理論」安田三郎他編『基礎社会学II 社会過程』所収 東洋経済新報社
- Stebbins, Robert 1967 A Note on the Concept of Role Distance A. J. S. ( 73-2 ): 247-250
- 立岩真也 1986 「制度の部品としての「内部」」ソシオロギス10

( さかもと かづえ )